
電波注意報

榊原

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電波注意報

【Nコード】

N7733F

【作者名】

榊原

【あらすじ】

ある無気力な高校生を中心に巻き起こる、喧しく、騒がしく、ややこしい話です。

第1話：桜

「——すう、すう」

桜が咲き乱れるこの季節。俺は、一人学校のグラウンドの片隅で寝息を立てていた。

ひゅるり、一陣の風がそつと俺の頬を撫でるように吹き抜け、俺の意識を呼び覚ます。その風が、可憐に咲き誇る桜の花びらを咲いていた木の枝から奪い去り、ひらひらと優雅に踊る。

「ほんと、馬鹿みたいに綺麗だな」

何故か自慢気に見えたその光景に、俺は呆れたように素直な感想を漏らした。

「へえ、馬鹿にはこんなに美しい桜も、馬鹿に見えてしまうんだな」

すると、俺の事を桜の木に隠れて見ていた一人の男が前髪を掻き上げながら俺に話掛けてきた。

「全く、これだから馬鹿は……」やれやれ、と男は溜め息をつく。

「知ってるか？ 亜田原。馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ」

「お前は小学生か」けらけらと亜田原が笑い、俺の隣に腰を下ろした。

こいつはあたらかすき亜田原和樹。俺とこいつは、家が隣同士ということもあり、

お互いに小さい頃から親ぐるみの付き合いをしてきていたので、気が付けば親友と呼んでもおかしくない関係にまで発展していた。俗に言う腐れ縁ってやつである。

まあ、何だかんだ言ってもこいつは、ナルシストで女好きな所を除けば、意外と良いやつであるから、嫌いではない。

「そうだ、辰巳。お前に渡せって言われてる物があつたんだ」思い出したように亜田原はそう言つと、鞆の中をごそごと弄り、二通の手紙らしきものを取り出し、俺に差し出す。

「なんだ？今時ラブレターか？」

「いやー、校門の前でお前を大声出して探してる親切そうな男がいてよ、話を聞いてみたら、お前に手紙を渡したいって」

「で、もう一通は？」

「親切そうな男と話終わった後、お前に渡してほしって女の子が無理矢理渡してきた」

亜田原がやれやれという顔をしながら二通目の説明をした。

「さて、見ようぜ」

亜田原が俺に宛てられた手紙を俺から奪い、封を破いた。

「…何故お前が開ける」

俺が開けるべきだろ、普通に考えて。

「気にすんな、おっと、これは随分と気合い入ってんな」

どれどれ、と俺は亜田原が広げた手紙を覗きこんだ。

『——果たし状。』

桐生 辰巳に告ぐ。午後五時にて東公園にて待つ。決して逃げるこ
とのないように。』

と荒々しく筆で書いてあった。

「……すごい気合いだな」

何というか、気合いが入り過ぎて、字だけである程度見た目が想像
できる。きっと、馬鹿でかい柔道家のような男に違いない。

「おい、辰巳。面白い事になったぞ」

亜田原が、勝手に開封して見ていた二通目を、腹を抱えて笑いなが
ら俺に渡してきた。その手紙には、綺麗な細い字で、こう書いてあ
った。

『——桐生 辰巳様』

午後五時に、東公園で待ってます。来てくれると嬉しいです。』

どうやら、かなり面白い事になってしまったみたいだ。

第2話：東公園

手紙を読み終えた俺は、約束の時間まで少し時間が余っていたので、適当にコンビニで立ち読みをして時間を潰し、東公園に向かった。

亜田原と一緒に

「なんでお前も来るんだよ」

「だって、面白そうじゃないか」

まあ、こいつは来るなと言っても来るだろうから、追い払っても無駄だろうな。

東公園に着くと、俺と亜田原はこれから別行動をする事にした。

俺は、手紙の差出人の二人を見つけ出し、それから…。それを亜田原が物陰から高みの見物をする。というのが亜田原から聞かされたこれからの流れである。少しばかり理不尽な気もするが、俺はあまり気に留めず、例の二人を探す為、辺りを見渡すと、ベンチに腰掛けている、女連れの大男と目が合った。

うわっ、厳つつ。身長もやたらとでかいし、目も鷹のように鋭い。きつと、俺に果たし状を書いたやつもこんな風貌してるんだろっなとかそんな事を考えながら、この場を立ち去ろうとすると、大男が俺に近付いてきて、俺の目の前に立ちはだかると静かに喋り出した。

「桐生、よく来たな。待ってたよ」

「…っていうことは、もしかしてあんたが？」

「そうだ、果たし状をお前に渡すように言った張本人だ」

何て言うか、想像通り過ぎて怖いほど、目の前にいる男は、俺が手紙から連想した男と瓜二つだった。二つ、想像していた男と、実際の男との相違点があるのだが、それは『普段から柔道着を着ていないこと』と『語尾に“ごわす”をつけないこと』という、現実では有り得ないような事なのでしょうがないだろう。

「で、そちらは？」

俺は大男の横に立っている女性が誰なのか、気になるので訊ねてみた。

「お前の彼女か？」

「違います！手紙のもう一人の差出人です！少しばかり早く公園に来たら、今日私より先に手紙を渡していた男の人を見つけたので、少しお話をしていただけです」

俺の大男への問いを、頼みもしないのに横にいた女性が答え、親切にも、返答の中に今の状況の説明も含まれていた。

「成る程、状況は良く理解できた」

きつと、俺たちのこの様子を見て、どこかの馬鹿は笑い転げているに違いない。

「で、どっちから先に話を済ませる？」

俺はこんな事一瞬でも早く終わらせて、家に帰りたいのだ。

「ああ、それなら大丈夫。お前が来るまで暇だったから、じゃんけ
んして決めといた。濱野からだよね？」

「うん！」

何で若干仲良くなってるんだよ。

「では、どうぞ」

俺は濱野と呼ばれた女性の方に向き直った。

「あ、えと、その…私、濱野由佳里はまのゆかりって言います。あの…私と付き
合ってください！」

「お願いします！」と濱野が頭を下げ、俺に右手を差し出してく
いた。

「無理」俺は即答した。

「ひどい…」

濱野はそう言っ、その場に力無くへなへなとへたり込んだ。

「で、お前は俺に一体何の用だ？」

俺は大男の方を向き、大男を見上げながら質問した。

「ああ、お前さ、楠木って名前に聞き覚えは無いか？」

楠木?…くすのき?…クスノキ?…KUSUNOKI?…記憶の中から必死に楠木という名前の人物を探そうとするが、一向に思い出せる気配がない。

「すまん、知らん」

「そうか…じゃあ、しょうがないな」

大男は着ていた服を腕捲りすると、鋭い目を更に鋭くして言った。

「桐生、構えろ」

「…喧嘩からは足を洗ったんだけどな」

そう言いながらも、俺は戦闘態勢に入る。

俺と大男は、暫くの間睨み合い、お互いに一息着いた後、俺と大男は拳を振り上げた。

「おらあ!」

「……………」

そして、俺は喧しく喚きながら、大男は黙って俺を見ながら、拳を力の限り標的へと突き出した。

「ちょっと!やめなさいよ!」

その時、濱野が俺達の喧嘩をどうにかして止めようと、俺達二人の間に割って入ってきた。

「「!!!!!!」」

俺は突然の濱野の登場に驚き、拳を止めようとしたのだが、濱野の登場が唐突過ぎたので拳の勢いを殺しきれなかった。そして、俺の拳は濱野の顔面にクリーンヒットした。

「「あ」」

大男と声が重なり、大男の方を見ると、どうやら俺と同じ事態に陥っているようだった。という訳で、濱野は俺と大男からのパンチに挟まれて、悲惨な事になってしまっていた。
もしも、濱野が芸人か何かなら、この出来事は、かなり『おいしい』のだろうが、生憎、濱野は芸人ではなかった。

第3話：電波

正直な話、俺は今、非常に混乱していた。その原因はおそらく、今日は俺にとって、初めて体験する出来事が多すぎたからだと思われる。

初ラブレター（×2）から始まり、初告白、高校生になってからの初喧嘩、そして、初女の子の顔面にパンチである。

「大丈夫か？」

俺は初女の子の顔面にパンチを決めた、濱野に恐る恐る話し掛けた。

「だ、大丈夫か？」

大男も俺の言葉に便乗するように、濱野に声を掛けた。

「大丈夫だと、思っんですか？」

濱野が自分の両頬を大事そうに擦りながら、笑顔で俺と大男に問い掛けた。

「……………」

大丈夫だと思います。と、言いかけたが、その言葉を口にしても、自分の状況が好転するとは思えず、俺はきゅっと口を真一文字に結んだ。

耐える、俺。

「あなたたちは、女の子が自分の体で、一番大事にしてる所がどこ

か知ってる？顔よ、顔」

濱野はグチグチと俺と大男に愚痴をこぼす。飛び出してきたのはあなたでは？と、言いそうになったが、その言葉を口にしても、彼女の機嫌を直せるとは思えず、俺は口を噤んだ。
耐えろ、俺。

「まあまあ、そこらへんで止めといてやりな、嬢ちゃんよ」

愚痴を垂れ流していた濱野の肩を、おっさん口調の少女が軽く叩いた。

こんな面倒臭そうな話に首を突っ込むなんて、物好きだな、と思い、俺はその少女を観察する。華奢な体、背中まで届いている、長く、綺麗な髪、服装は、俺が通っている高校の女子の制服だった。まあ、口調以外は普通の女の子であると思われる。

しかし、誰だか知らないが、助かった。俺は心の中で、安堵の息を漏らした。

「どこの誰だか知らないけど、あなたには微塵も関係ないでしょ。黙っててよ」

濱野がしっしっ、と犬を追い払うように手を払いながら言った。

「いや、実は関係あるんだな、これが」

少女がやれやれ、と息をつきながら答える。

「そこにあんた」

少女が不意に俺を指差した。おいおい、俺はあんたと初対面の筈だ

ぞ？

「何？」

俺は少し警戒しながら少女を見る。初対面、だよな？

少女は俺に近付くと、にやり、と意味ありげな笑みを浮かべると、口を開いた。

「惚れた」

ちよつと待て、ちよつと待て、ちよつと待て。

少女からの突然の告白に、俺は脳内で軽いパニックを起こしながらも、少しでも冷静になろうと、俺は少女に質問した。

「お、俺のどこに惚れたんだ？」

俺からの質問に、少女は待ってました、と言わんばかりに、嬉しそうに答えた。

「そりゃあ、男でも女でも、構わず殴るところだね。はっきり言うて、痺れたね」

どこに痺れてるんだお前は、と心の中で俺は突っ込みを入れた。

「ちよつと待て、濱野なら俺も殴ったぞ」

大男が俺と少女の話を聞いて、しゃしゃり出て来た。わざわざ自分から名乗り出るような事じゃないと思うんだが。

「ああ、あんたは顔がタイプじゃねえから」

少女は面倒臭そうに大男に言った。

「……そうか」

大男は寂しそうにそう言うと、ポケット両手をつ込み、公園の出入り口の方へゆっくりと歩いて行く。大男は公園の出入り口付近に停めてあった一台の自転車に跨ると、一度だけ振り返り、

「桐生、またな」と、なぜか俺にだけ別れを告げた。
またな？

「…私も帰る」

濱野もふらふらと頭を抱えながら公園から出て行った。

「あ、返事は？」

思い出したように少女は俺に告白の返事を要求してきた。

「丁重にお断り致します」

「へえ、分かった」

意外にも物分かりが良いのか、少女は当然のように俺の言葉を受け入れたようだった。

少女は暫く黙っていたが、暫くすると、俺に向かって人差し指をぴんと立てると、少女は俺に宣言してきた。

「あ、これからあんたのことストーキングするんで宜しく」

ストーキングされると言えども、ここまではっきりと宣言されると、清々しい。

「あ、こちらこそ」

俺は軽く会釈した。

第4話：日常

ちゅんちゅん。
ちゅんちゅん。

雀と思われる鳥が、窓の向こうで可愛らしい鳴き声を響かせ、俺に朝を告げた。

朦朧とした意識のまま、枕元に置いている携帯電話を開き、現在の時刻を確認した。

七時十分か…なかなか良いタイミングで起きたもんだな。

「…しかし」

俺は一度携帯電話を閉じ、瞳を閉じて心を落ち着かせ、心の準備をした後、ゆっくりと携帯電話を開き、画面を覗き込んだ。

メール着信31件。

「やっぱり見間違いじゃなかったのか…」

確かに昨日ストーキングを宣言されたが、やはり、現実でされてみると、なんというか、怖い。

ていうかどこから俺のメールアドレスを入手したんだ。

しかも、この31件という着信数がやけに現実的な数字で、不気味だ。

念のため、頭を抱えながらも、全部読んでみたが、内容は自己紹介や挨拶などで、思っていたよりもまともなもので、少し安心した。俺は取り敢えず、気持ちを切り換えて、いつもの朝のように、顔を

洗い、歯を磨き、制服に着替え、朝飯を口に適当に突っ込み、鞆を手にすると、学校へと向かうべく、玄関のドアを開けた。

「あ、桐生先輩！おはようございます。こんな所で会っなんて運命的ですねえ！」

「…おはよう、葛城」

玄関のドアを開けた先には、ストーカーの葛城木綿子^{かづのきぬこ}が、満面の笑みで俺を待ち受けていた。「あれれ？桐生先輩ってば元気が無いですねえ？低血圧ですか？」

葛城が俺の顔を覗き込みながら、疑問をぶつけてくる。

「お前こそどうしたよ、口調変わってるじゃねえか」

確か、公園で会ったときはおっさんの様な口調だった筈。

「ああ、口調は日替わりなんです」

なんじゃそりゃ。

「あ、それよりも取り敢えず学校に向かいません？話は歩きながらできますし」

「それもそうだな」

俺はポケットに手をつっ込み、葛城と肩を並べて学校へと歩き出した。

「で、さっきの話の続きだけだよ、なんで口調が日替わりなんだよ」

「ああ、それはですね、来るんですよ。毎晩」

「何が？」

「電波がです、『明日のお前はこんな感じだ』って」

葛城がどこか遠くを見ながら意味不明な事を話している。

ああ、そうか。そっち系の子だったのか。

「…そうなんだ」

俺は若干引き気味に答えた。本当に存在しているんだな、こういう系の人って。

「まあ、嘘ですけど」

葛城が小さく舌を出しながら小さく呟いた。

「嘘かよ！じゃあ本当の理由は何なんだ？」

「覚えてて欲しいんですよ、私を」

葛城がにこりと微笑み、俺に語り掛ける。

「どついう事だ？」

「例えばですよ？もし私が語尾に『ござる』を付けていたら、桐生先輩は私のことを“『ござる』を語尾につける変な奴”って思うで

しょう?。」

「そりゃ思うだろ」

「でしょ? 私は、それが嫌なんです。見た目とか、話し方じゃなくて、ちゃんと私自身を見て欲しい、覚えて欲しい」

葛城が胸に手を当てながら力説する。余程拘りがあるのだろう。しかし、俺はその話が少し納得出来なかった。

「でもさ、葛城が口調をこころ変えても、相手は葛城の事を“口調がこころ変わる奴”って思うから、結局一緒なんじゃねえの?」

「まあ、それを言われたら言い返せないんですけど…まあ趣味みたいなもんですよ」

「えらく変わった趣味だな」

「人間何か一つぐらいは変わった趣味を持つてるもんですよ。桐生先輩も変わった性癖の一つぐらいは有るでしょう?」

「ねえよ」

多分、無い筈だ。

「それは残念です。でも、私の変わった趣味も今日で終わりにする事にしました」

「なんで?」

なんか、今日は疑問符を妙に使うな、俺。

「…それは、秘密です。——っと、ここでお別れみたいです。では、桐生先輩、私はここで」

気が付くと、俺と葛城は学校に到着していた。葛城は、一年生の下駄箱の方向へ走って行った。

「おう、じゃあな」

俺は鞆を持っていない方の手をひらひらと振って葛城に別れを告げた。

第5話：喧騒

俺は、学校が嫌いだ。そりやあもう反吐が出る位に。

そもそも、“生徒”という言葉も嫌いだ。生きながら従うと書いて生徒。酷いものだ。

俺は葛城と分かれた後、一人でそんな気持ち悪い事を考えながら、二年生用の下駄箱で靴を脱ぎ、鞆から取り出したスリッパへと履き替えていた。そして脱いだ靴を下駄箱に直そうとしたところで、俺は固まった。

「俺って何組だ？」

そうだった。

俺は始業式をサボっていたんだった。さて、どうしたものか。黙って考え込んでいると、遠くから何かが雄叫びのような声を発しながらが凄い勢いでこちらに向かってきていた。

「うわああああ！遅刻だああああ！」

携帯電話を開き、時刻を確認してみると八時十分だった。

朝のホームルームは八時三十分からだ。どう考えても、今の時刻は遅刻にはなりえない時間だ。

何か勘違いでもしているのだろう。

携帯電話を閉じ、学生服のポケットにしまい、顔を上げると、他の生徒は俺と遅刻と勘違いしているそいつとの花道でも作るように、綺麗に退いていた。

そして、そいつは俺の方へ向かってくる。全く勢いを殺さずに。そこで俺は悟った。

「ああ、お約束ってやつか」

鈍い音がして、視界に一瞬星が浮かび、気が付くと俺とそいつは床に転がっていた。俺はどこかに飛んでいきそうな意識を必死に繋ぎ止め、起き上がると、横で倒れているそいつを乱雑に揺さぶった。

「おい、起きろ」

「……………」

反応は無い。

「…遅刻だぞ」

「ええええっ!!?」

ガバツと勢いよくそいつは立ち上がった。
遅刻という単語が大好きみたいだな、こいつ。

「おはよう、見知らぬ騒がしき少年よ」

「うえ? あ、はじめまして…ってそんな事より遅刻になってしまっ
!」

そう言っただけでそいつは靴を素早く履き替えると、廊下を猛ダッシュで駆け抜けた。少年Aが去った後、名前ぐらいは覚えてやろうと、俺は下駄箱に書いてある名前を確認した。

「霧島…哲…」

騒がしい少年Aには似つかわしくない知的な名前だった。

「あ」

2年3組・桐生辰巳

霧島の下駄箱の下を見ると、そこには俺の名前があった。

俺はそこに学校までの道のりでお世話になったスニーカーを突っ込み、スリッパを履き、霧島の下駄箱に軽くでこぴんをした。

「これで勘弁しといてやるよ」

我ながら、ガキだな。

と少し呆れた。

教室に着くと、まだ時間が早いからかどうなのかは分からないが、四十個程の机が並ぶ中、半分以上が空席だった。

時計を見ると八時十五分。

少し早く来すぎたな。

教室を見回してみたが、そこに見知った顔は無かった。何故か、俺より先に行った筈の霧島の姿も見当たらない。

と言っても、俺にとって友達と呼べる人間は亜田原ぐらいしかいないのだが。

そんな望まぬ一匹狼の俺の今の心境は、寂しくないとれば嘘になり、寂しいかと問われればイエスである。

しかし、俺は奇跡的に社交性が無い。自ら話し掛けに行くなんて、

そんな神業出来るわけもなく、机に突っ伏して、朝のホームルームを待つことが、今俺に出来る最善で唯一の選択だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7733f/>

電波注意報

2010年10月10日06時34分発行